

令和7年10月14日

保護者の皆様

県立市ヶ尾高等学校
校長 富澤 桂子

令和7年度第1回「生徒による授業評価」集計結果について

令和7年7月、本校生徒に対し「生徒による授業評価」を実施しましたので、結果を報告いたします。

1 授業評価の概要と結果

(1) 評価項目

大項目	設問	小項目
ついでに授業の在り方に	1	毎時間の授業や単元のはじめに学習のねらいを示したり、毎時間の授業や単元の学習のあとに学習したことを振り返ったりする機会がある。
	2	単元（内容のまとめ）の学習の中で、他者の考えを知り、自らの考えを広げ深める機会がある。
	3	単元（内容のまとめ）の学習の中で、課題について自分の考えをまとめたり、解決方法について考える場面がある。
学習の状況について	4	授業の中で身についたことや、できるようになったことを実感することができた。
	5	他者の考えを知ることにより、新たな考え方を知るなど、自らの考えを広げ深めることができた。
	6	授業で得た知識をもとに、自分の考えをまとめたり、課題の解決方法を考えたりすることができた。
	7	授業で学んだことをそれまでに学んだことと関連付けて理解することができた。

(2) 評価

(1) の項目について次の4段階で評価を行った。

4 かなり当てはまる 3 ほぼ当てはまる

2 あまり当てはまらない 1 ほとんど当てはまらない

(3) 集計と処理

教科ごとに集計を行い、小項目の評価が肯定的な回答（評価「4 かなり当てはまる」又は「3 ほぼ当てはまる」）の割合を算出した。教科ごとに肯定的な回答の割合が最も高い項目には塗りつぶし太字、最も低い項目には下線で明示した。

(4) 各教科の小項目の肯定的な回答の割合

設問	1	2	3	4	5	6	7
国語	86.6%	90.7%	90.9%	<u>83.7%</u>	89.8%	88.7%	88.5%
地歴・公民	82.7%	82.4%	85.0%	<u>80.0%</u>	83.2%	87.1%	89.5%
数学	81.3%	81.1%	89.6%	92.4%	<u>78.3%</u>	88.5%	91.4%
理科	85.2%	81.7%	86.9%	84.9%	<u>81.6%</u>	88.6%	87.9%
保体	90.1%	87.5%	92.0%	89.9%	<u>86.7%</u>	92.0%	92.9%
芸術	92.2%	92.4%	96.1%	94.8%	91.6%	<u>91.3%</u>	91.3%
外国語	<u>87.2%</u>	91.1%	88.9%	90.7%	88.1%	89.3%	92.9%
家庭	91.4%	91.1%	91.7%	<u>88.5%</u>	<u>88.5%</u>	91.4%	90.8%
情報	84.2%	<u>81.7%</u>	88.1%	86.1%	82.3%	89.8%	89.5%

※塗りつぶし太字は教科内で最も割合の高いもの、下線は教科内で最も割合の低いものを表します。

各教科の分析と改善の手立て

分析		改善の手立て
国語	<ul style="list-style-type: none"> 設問3の評価が最も高くなかった。ただ知識を受容するだけでなく、自らの考えを深めていく機会を作ることができていると考えられる。また、設問2の数値も高いことから、深めた自らの考えや意見を周囲と交換することでより広い視座を身に付けられているものと考えている。 評価が最も低くなったのは設問4であった。現状の授業では「自ら考え、深める」という機会は多いものの、具体的に何かができるようになったという実感は得られにくいものと思われる。考えを深めるばかりではなく、体得した知識を活用できるような場面を設定すれば改善に向かっていくのではないか。 	<ul style="list-style-type: none"> 学習活動の中での言語活動を通して、自ら考え、その上で他者と関わり伝え合う「対話的な学び」を行う機会を今後も確保する。 身に付けた知識や技能を実践できるようなテストや演習の機会を用意する。
地歴 公民	<ul style="list-style-type: none"> 設問6、設問7の評価が高く、グループワークやまとめ活動を通して、学習内容を深化・発展させていくことができていると考える。 設問4の評価は前回のアンケート結果と同様に最も肯定的な解答が低い結果となった。前回の改善の手立てでは、ペアワークやICTの活用、単元間のつながりを意識した授業展開を講じていくこととしたが、期待する効果は十分には得られなかった。講じた手立ては、授業内容の理解には繋がった一方、活用の段階にまで十分に結びつかなかつたのではないか。 	<ul style="list-style-type: none"> 基礎的な知識技能の定着を図る場面でグループワークやICTを用いるだけでなく、身に付けた知識を活用し現代社会の諸課題の解決方法を検討する場面や、小テストや振り返りの場面の中でもグループワークやICTの活用を計画的に行うことで、設問4の数値向上を図る。 単元のつながりを意識した問い合わせの設定に引き続き取り組み、問題解決を図る過程で史資料を読み解いたり、他者と意見を交換したりする活動を支援することで、主体的・対話的で深い学びとなる授業を展開し、設問1、2、5の数値向上を図る。
数学	<ul style="list-style-type: none"> 設問4、7において、説明の工夫や、問題演習の時間を多く取り、教員から生徒個人へのアプローチが多いことが学習効果の実感を感じやすい要因となっていることが考えられる。 設問2、5において、生徒同士の考え方を知る機会が少ないと感じている生徒が多いと捉えることができる。進度との兼ね合いで十分に時間を取りきくことができない点や、解答が教員の説明したことによる収束しやすいことが要因と考えられる。 	<ul style="list-style-type: none"> 効果的な説明や生徒一人ひとりの活動の時間を多くとることを継続しながら、ICTを活用することによって、生徒同士の解答の書き方、考え方を共有する機会を作り、数学的素養を伸ばしていくようにする。
理科	<ul style="list-style-type: none"> 全ての設問において肯定的な回答が多いものの、設問2・4・5の「他者の考えを知り、自らの考えを深める」「出来るようになったと実感」においては他の設問よりも否定的な回答をした生徒の割合が多い。これは理科の教科特性として難易度が高く、また教員も生徒の考察力を深めることよりも問題を解決するようになることを優先してしまいやすいことが挙げられる。そもそも高校の理科の現行カリキュラムでは、指導要領に掲載されている授業で想定されている観察実験や探究活動においても正解が存在してしまい、一人一人が異なる意見や考えを持つことが難しい。そのため様々な思考を知り、自らの施行を深めるためには現象から理を掘り下げていく帰納的な学習の他に、現象や理を活用する枝葉を広げる演绎的な学習活動を織り込む必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 一例として現在学んでいる単元を応用した最新技術や課題解決の方策を学ぶことで、考察力を磨くと共に、生徒の理科への興味関心の醸成を図る。
保健 体育	<ul style="list-style-type: none"> 概ね高い満足度を得ている。前回の分析でも触れているが体育と保健の総合値などで実技の満足度が底上げにつながっているのではないかと予想される。 	<ul style="list-style-type: none"> 9月から体育館および周辺施設の使用ができなくなる。2回目以降の調査では実技を行ったことによる満足度が関連する項目では数値の変化がみられるかも知れない。著しく数値を下げないために座学での分析の機会を増やし生徒自身が知識の定着が実技の向上につながることを実感できる授業を展開する必要を感じる。
芸術	<ul style="list-style-type: none"> 全ての項目において、「かなり当てはまる」「ほぼ当てはまる」の割合が高くなってしまっており、授業に対する生徒の満足度は高いと考えられる。 設問6、7の評価が低い点から、学んだことから解決方法を考えたり、過去に学んだことと関連付けて理解することが難しかったと考えられる。 	<ul style="list-style-type: none"> 実技科目としての特徴を生かし、引き続き、生徒の興味・関心を高める授業構成、教材開発を考えていきたい。 鑑賞や振り返りの時間を増やし、知識や考えを深めることのバランスを工夫していかたい。 適切な場面に効果的な学習方法（考えることの大切さ）を取り入れ、今後もより良い授業展開となるよう努めていく。
外国語	<ul style="list-style-type: none"> 7つの質問項目のうち設問6以外はおよそ45%の生徒が「かなり当てはまる」と回答しており、一昨年（R5）がすべて30%代であったことからすると、生徒の授業に対する全体的な満足度は向上していると言える。中でも設問4については、昨年度第2回のアンケートから約5%向上している。これは、授業において知識の定着が十分に図れること、振り返りの実施により生徒自身が的確な自己分析を行える力が身についてきたこと等の要因が考えられる。 一方、設問6がやや低い満足度となっている。知識の定着や既存の知識との関連付けは比較的うまくいっていると言えるが、課題解決といった知識の活用力を育む指導に課題があると考えられる。 	<ul style="list-style-type: none"> 他と比べ満足度が低かった設問6に対する改善策としては、例えば、テキストの題材をもとにディベートを行い、自分とは意見の異なる他者と対話をに行なながら自らの思考を整理、構築していくような活動をさらに取り入れたり、生徒の思考が拡がっていくような推論発問や拡散的発問など発問の工夫を一層行っていく必要があると考える。また、対話の中で生徒が自ら思考し、新たな気づきに到達することを促すための教師自身のファシリテーション能力も高めていく必要があると考えられる。
家庭	<ul style="list-style-type: none"> 全ての項目において肯定的な評価の割合が高く、特に設問2「単元の学習の中で、他者の考えを知り、自らの考え広げ深める機会」に関しては、約9割の生徒から「当てはまる」の評価を得られた。本校教科目標である「生活のなかから課題を見出し解決する能力を身に付ける」という点を意識して授業を行っており、毎時間のアクティビティを通して意見交換の場を設けており「他者の価値観や生き方を理解し自身の生き方や考え方の方向性を構築」していく授業を開拓している成果が得られていると考えられる。 設問5「自らの考えを広げ深めることができた」かの質問は、将来の生き方に関わることなので10年後、20年後の評価を待ちたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 今後も日常生活と関連させながら、課題を意識させる授業展開を継続しておこなう。 食生活、衣生活、住生活分野では1学期に学習した人生設計を元に、将来の理想的な住居を考え簡単な平面設計図を製作する。食生活・住生活・消費生活などの単元において、より身边に感じられ、日常生活において課題意識を持ち解決できる力を身につけられるような授業内容を研究し展開していく。
情報	<ul style="list-style-type: none"> 全ての項目において、「かなり当てはまる」「ほぼ当てはまる」の割合が8割を超えており、授業に対する生徒の満足度は概ね良好であると考えられる。特に設問3・6・7については9割近い生徒が「かなり当てはまる」「ほぼ当てはまる」と回答しており、自分の考え方をまとめ問題解決へつながる力が向上したものと考えられる。 設問2・5の評価が比較的低かったことより、他者の考え方を知り、自分の考え方を深める機会（例えばグループワークなど）が若干少なかったものと考えられる。 	<ul style="list-style-type: none"> 今後も、自分の考え方をまとめ問題解決へと導ける力を向上させるよう授業展開をしていく一方で、他者の考え方を知ることのできる、そして自分の考え方を深められるようグループワークなどの機会をより多く設定していく。